

## シアトル・ゼネラル・ストライキと 日系人労働者（I）

黒 川 勝 利

ストライキの興奮のさなかではあるが、しばし手を休めて日本人理髪師およびレストラン労働者の行動に注目しよう。彼らは、自分たちの組合において、ゼネラル・ストライキに参加することを決定した。ここシアトルにおけるストライキは、わが国におけるこれまでにない国際主義のデモンストレーションの機会となりつつある。

日本人はこれまで労働運動のその他の部分から参加を拒否されてきて、彼ら自身の発意によってストライキに参加したのであるから、このことは一層賞賛に値する。……

*The Seattle Union Record*, February 5, 1919

### はじめに

第一次大戦が終ってまもない1919年2月、ワシントン州シアトルにおいてアメリカ合衆国史上はじめての本格的なゼネラル・ストライキが発生した。このいわゆるシアトル・ゼネラル・ストライキは、シアトルやワシントン州のみならず全合衆国の国民に大きな衝撃を与え、ボストンの警官ストライキなどとならんでその後の赤狩り Red Scare の重要な契機となった。

このストライキは、単にシアトルという地方都市における経営者と労働団体の関係にとどまらず、戦時経済体制のもとでの連邦政府の労使関係への介入の性格、東部を基盤とするアメリカ労働総同盟 American Federation of

Labor（以下、AFLと略す）主流派とシアトルを中心とする北西部の労働運動との関係、さらにはロシア革命に対するアメリカ労働者の反応などといった、アメリカ労働史上のいくつかの重要なテーマを考えるにあたっての重要な素材の一つとして、多くの労働史家によって注目されてきた。

しかしながらこのストライキに、当時の合衆国の労働運動の主流から疎外され、いやむしろ差別と迫害の対象であった日系人労働者が参加していたという事実は、少なくとも合衆国の労働史家たちによっては、ほとんど無視されてきたように思われる。

当時のシアトルの労働者の中でどの程度の割合を日系人が占めていたか、さらには彼らの参加がストライキの動向にどの程度影響を及ぼしたかを考えると、これは当然のことかも知れない。

しかしながら当時の白人労働者、あるいはその指導者の少なくとも一部は、日系人労働者が、おそらくは彼らのほとんどの予想を裏切って、自発的にこのストライキに参加したという事実に注目し、ストライキが悲惨な敗北に終わった後もその事実を忘れなかった。かくしてゼネラル・ストライキは、一般的にはむしろ日系人に対する差別、圧迫が強まりつつあった当時の風潮の中で、合衆国北西部、特にシアトルにおける労働運動と日系人との関係を、ささやかながらも好転させたのである。

本稿の目的は、このようなゼネラル・ストライキと日系人との関連をより詳細に吟味することである。しかしながら、わが国でシアトル・ゼネラル・ストライキの研究がほとんどなされていない現状を考慮して、当時のシアトルを中心とした合衆国北西部の労働運動の特質、それと合衆国労働運動主流派との関係などの問題についても、可能な範囲で検討を加えたい。

## I ゼネラル・ストライキ以前のシアトル労働運動と日系人

はじめに、ゼネラル・ストライキが発生する以前のシアトルを中心とする

アメリカ北西部における日系人社会の動向を、労働運動との関係に重点を置きながら、簡単に見ておきたい。

シアトルを中心とするアメリカ北西部へ日系人が本格的に移住してきたのは、中国人労働者排斥運動の後のことであった。初期の日系人にはカリフォルニアやカナダのヴァンクーヴァー方面からの移住者が多かったが、1896年に日本郵船会社がシアトルに日本からの航路を開いてからは、直接日本から渡航してくる人々が増加した。なお、1909年には大阪商船会社がタコマに航路を開いた。<sup>(1)</sup>

この間に、日系人の生活状態、職業にも大きな変化があった。1921年に出版された『米国西北部在留日本人発展略史』はこれを次のように要約している。

斯くの如くして支那人に代り太平洋沿岸に移住したる日本人は鉄道鉱山農園に就働し就中鉄道就働者は全労働者中の六割を占め農業一割、製材労働二割、家内労働一割の状態にありたり、其の後鉄道労働は一九〇六年来減少し農園、製材労働増加し更に其の後に至り独立農業者及雑商業者の出現するに至り現在に及べるものなり而して一九〇六年布哇航禁禁止来移民労働者の渡航の途絶するを以て各般の社会経済状態は変化し邦人は故国より妻子家族を迎へて漸次独立農業商業の経営者増加する事となれるなり。<sup>(2)</sup>

もちろん、シアトルのような都市部だけに焦点を合わせると、同じ日系人社会でも若干異なった発展の様子を見ることになる。これについては、やはりシアトルで発行された『北米年鑑』の1928年版の一部を引用しておこう。

明治二十年前後のシアトル在留日本人中レストラン業に従ふ数名を除いては全部

(1) 米国西北部連絡日本人会編『米国西北部在留日本人発展略史』米国西北部連絡日本人会、1921年、3-4頁。

(2) 同上、4頁。なお、本稿では引用文の旧字体は新字体に変更している。

コックや、皿洗ひ、ウエイター等に従ふ労働者でその多くは書生上がりと脱船者であった。書生輩は多少言語に通ずる関係上ウエイターとなり、脱船者輩はコックとして労働していた。明治二十二年六月シアトルに大火があって以後市街は旧態を一新し、日本人も洋食店以外の雑貨商、果物商、ホテル業、靴屋、理髪業等に従事するもの続出し、同胞の経済状態もやゝ見るべきものがあつた。……

明治三十年頃を画期としてシアトルの日本人は一般在米日本人と同じく漸く秩序ある活動期に入り、明治三十三年には市内在住者三千九百七十九人に増加し、三十七八年の日露戦争後は更に飛躍的發展を遂げて各種事業に活躍し、在留者も明治四十三年には五千人内外を数ふるに至つた。<sup>(3)</sup>

その後も日系人社会の發展は続き、シアトルの日系人経営事業数は1903年の223件から、1908年には431件、1913年には510件に増加した。<sup>(4)</sup>ゼネラル・ストライキの翌年、1920年のシアトル在留日系人の人口は日本政府の国勢調査で9066人に達している。これは全ワシントン州の日系人の人口のほぼ半分である。<sup>(5)</sup>ちなみに当時のシアトルの全人口は約30万人であった。<sup>(6)</sup>

このような日系人社会の發展の過程でもっとも彼らを悩ませたのは、言うまでもなく合衆国白人の反発であり、特に労働者、労働団体の排日運動であった。

周知のように、白人労働者主体の労働団体とアジア系移民との関係はけっして良好なものではなかった。特に一九世紀後半および二十世紀初頭において、労働団体はアジア系移民排斥運動の中心であり、原動力であった。他方アジア系移民も、しばしば無知の赴くところスト破りとして利用されてこの

(3) 北米時事社『北米年鑑』北米時事社、1928年、78-79頁。

(4) 村山裕三『アメリカに生きた日本人移民——日系一世の光と影』東洋経済新報社、1989年、122頁。

(5) 米国西北部連絡日本人会編『前掲書』、8頁。なお、同年の合衆国政府の国勢調査では7874人である (Katharine Jane Lentz, "Japanese-American Relations in Seattle," M. A., University of Washington, p. 1)。

(6) 北米時事社『前掲書』73頁。

ような傾向に油を注いだのである。

このような事実は、シアトルを中心とする太平洋岸北西部においても同様であった。シアトルに住んでいた中国人のほとんど全員が、白人暴徒によって強制的に他の地方に追放された1885年-86年の反中国人暴動には、労働騎士団 Knights of Labor をはじめとする当時の労働団体が関係していた。過激な手段に反対して法と秩序の維持を説いたのは資本家や上流階級に属する人々だったのである。<sup>(7)</sup>

20世紀初頭のシアトルの日系移民労働者は、1880年代の中国人労働者と比べれば、あるいは排日運動の震源地と化したカリフォルニア州のサンフランシスコに住んでいた日系人と比べれば、より幸運であったように思われる。しかしながら、このことはもちろんシアトルを中心とする北西部の労働団体と日系人労働者との間に何も摩擦がなかったということを意味するものではなかった。

1899年には、シアトル北方のエベレットで、日本人労働者が雇用されたことに抗議して白人労働者がストライキに入り、日本人労働者を襲撃しようとする動きが見られた。1907年にはカナダのヴァンクーヴァーで日本人を含む反アジア人暴動が発生したが、これを煽った指導者の中にはシアトルの労働運動家が含まれていた。他にも、散発的ではあるが日系人を対象とした排斥運動がシアトルとその周辺地域で発生し、その中には労働団体が関係しているものが少なくなかったのである。<sup>(8)</sup>

もちろん、このような状況にまったく変化がなかったわけではない。1905年にサンディカリストやマルクス主義者によって設立された世界産業労働者連盟 Industrial Workers of the World（以下、IWWと略す）は、周知のように、熟練度や人種に関わりなく全労働者を組織することを原則として

---

(7) Jules Alexander Karlin, "The Anti-Chinese Outbreaks in Seattle, 1885-1886", *Pacific Northwest Quarterly*, 39, 1948, pp. 103-130, cf. W. P. Wilcox, "Anti-Chinese Riots in Washington", *Washington Historical Quarterly*, 20-3, 1929, pp. 208-211.

おり、日系人や中国人に対する態度も、当然のことながらAFL系の組合とはかなり異なっていた。

他方では日系人の間でも、アメリカにおける労働運動の意義と重要性を認識して、日系人自身の労働団体を結成することによって排日運動を牽制しようとする努力が行われるようになった。1914年にシアトルで設立された日系人労働組合の高橋会頭は、その目的とするところを次のように語った。

白人と接触して日米問題の解決に資せんには労働者をその標的となさざるべからず。彼等白人労働者と接触するには之に対する機関則ち労働組合の必要を痛切に感じたり。爾來労働組合として数回労働組合の幹部連と接触したるに頗る好意を以て遇し呉れたり。則ち労働者は同じ労働者によって交際せざるべからず。其の位置同等なれば其間に隔意を生ぜず。彼等と接触するには飽くまでも労働者ならざるべからず、斯くして幾分にては彼等労働者則ち排日の根源たる大勢力に接触して日本及び日本人を理解せしむることは日米関係解決に資する所尠なからずを疑はず。<sup>(9)</sup>

(8) 竹内幸次郎『米国西北部日本移民史』大北日報社、1929年、156-162頁。伊藤一男『北米百年桜』北米百年桜実行委員会、1969年、137-145頁。カナダや英国の新聞が主張したところによると、ヴァンクーヴァー暴動の主犯はむしろシアトルの人間であった。たとえば、英国のマンチェスター・ガーディアン紙は次のような記事を掲載した。

「ヴァンクーヴァーの反日暴動はアメリカ人扇動者を原因とするものであるという昨日の理論が正しいという証拠はすでに得られている。……デモンストレーションの指導者はカナダ人ではなく合衆国の市民であった。……彼らは、ワシントン州労働総同盟会長フランク・コッテリル、同州の反日本人韓国人連盟の書記 A. E. ファウラー、そしてシアトルの著名な労働運動指導者ジョージ・P. リッソマンであった。これらの男たちとともに多数の反日本人連盟の会員たちがヴァンクーヴァーにやってきた。

実際の暴力行為は大部分カナダ人たちによって行われたように思われるが、しかしその暴力がアメリカ人たちの扇動によって発生したことは疑い余地のないように思われる。」(Robert E. Wynne, "American Labor Leaders and the Vancouver Anti-Oriental Riot", *Pacific Northwest Quarterly*, 57, 1966, p.172.) なお、ワインのこの論文の結論は、結局この暴動は計画的に引き起こされたものではなかったが、しかし「それにもかかわらず、いくにかのアメリカ人たちは、結局は暴動を引き起こすような状況を作り出した責任を負わねばならない」ということである。(Ibid, p.179)

まもなく高橋会頭は、ワシントン州ラベンデル炭鉱の爆発事故で死亡した坑夫の遺族に組合員から集めた25ドル81セントを送った。これに対して、シアトルの労働者新聞ユニオン・レコード紙の編集長で、本稿でもゼネラル・ストライキとの関連で以後しばしば言及するハリー・オルトから「厚意を謝す」との礼状を受け取ったという。<sup>(10)</sup>

このような努力がまったく無益だったわけではもちろんない。たとえば、1903年に白人同業者による運動の結果として日系人の営業許可が取り消されそうになり、法廷闘争によってようやく解決を見た理髪業界では、その後次のような経過をたどって日系人と白人との間に良好な関係が成立した。

沙港（シアトル）日本人理髪業が、明治四十年（一九〇七年）に組織された動機は、当時邦人同業者間に盛に競争が行はれ、五仙（セント）で髭をそる者などがあつたからである。其後伊東忠三郎氏らの盡力により白人組合との関係が保たれ、理髪賃の協定、市令及び州法の制定等に関して互に意見の交換を行つて居る。之が為に日白同業者の関係は頗る円滑にて日本人組合の新年宴会には労働組合の幹部を毎年招待する事になつてゐる。<sup>(11)</sup>

理髪業の場合と同じく労働組合というよりは同業組合であるが、ダイウオーク業界においても排日運動との絡み合いの中で日本人組合が成立した。

一九一二年橋口長策氏等が主唱でダイウオーク組合が組織さるゝに至つた。動機は白人同業者の日本人排斥で、当時ホールセール店は日本人から一切ホールセールを採らないといふ決議をする所であつた。幸ひ同胞組合の設立に抛り、此の排日運動は之を取消す事が出来たのである。此の最初の組合は約一ケ年後に解散したが一九一九年山越、近

(9) 竹内幸次郎『前掲書』385-386頁。なお、『大北日報』1915年9月2日、参照。

(10) カール・ヨネダ『在米日本人労働者の歴史』新日本出版社、1967年、44頁。

(11) 竹内幸次郎『前掲書』325-326頁。

藤，保刈諸氏が奔走に依り復活し，其後今日の組合に発達したのである。

而して世界大戦中には沙港（シアトル）労働組合から日本人同業者に加盟を申込み来り，同胞組合員は一同加盟してユニオン，メンバーとなり白人同業者と対等の取扱を受ける事となった。……<sup>(12)</sup>

日系人と白人労働団体との以上のような関係改善は，しかしながら，あくまでも例外的なものであり，一般的には，ゼネラル・ストライキ勃発直前においてなお，シアトルにおける労働団体と日系人労働者の間が，連帯や友情よりも敵意と不安に満ちたものであったということは，ほとんど疑う余地がないように思われるのである。

## Ⅱ ストライキの背景

さて，第一次世界大戦はアメリカ合衆国に軍需生産に基づく好景気と労働組合の急成長をもたらした。太平洋岸北西部の中心都市として成長しつつあったシアトルも，もちろんその例外ではなかった。当時のワシントン州労働総同盟 Washington State Federation of Labor 会長ウィリアム・ショート William Short によれば，1915年に1万5000人であったシアトルの労働組合員数は，1917年には4万人，1918年末には6万人に増加したのである。<sup>(13)</sup>

言うまでもなく，その多くはAFL系の職業別労働組合に属していた。しかしながら，当時のシアトルのAFL系組合には，合衆国の他の都市には見られないいくつかの特徴があった。

第一に，シアトルのAFL系組合の組合員の間には，サミュエル・ゴン

---

(12) 『同上書』327頁。

(13) William Short, *History of Activities of Seattle labor Movement and Conspiracy of Employers to Destroy It and Attempted suppression of Labor's Daily Newspaper, the Seattle Union Record*, Seattle: Union Record Publishing Co., 1919, p. 1.



ペースに率いられた合衆国東部流の「純粹にして単純な pure and simple」労働組合主義、あるいはそもそも東部一般に対する反発と、西部、特にシアトルの労働運動のあり方に対する自信と誇りが強く存在していた。彼らの忠誠心、関心は、その所属する職業別の全国組合、あるいは国際組合の本部よりも、組合支部それ自体、あるいはその協議機関である各産業別の評議会 trade councils、さらにはシアトル中央労働評議会 Seattle Central Labor Council のような、シアトルに本部を置いた地域団体に向けられていたのである。

言うまでもなく A F L の原則では、支部組合を最終的にコントロールする権限を有しているのは、全国組合、あるいは国際組合の本部であって、この種の地域団体にその決定を覆すような権限はない。すなわち、地域団体は本来 A F L の機構の中でそれほど重要な役割を占めているわけではなく、国際組合の支部がこれらの地域団体に加盟することも、別に義務づけられているわけではない。

しかしながらここシアトルでは、非常に多くの、おそらくは合衆国の都市の中でもっとも高い割合で、A F L 系の組合が市の中央労働評議会に参加していた。また評議会の会議ではシアトルの労働運動が直面しているほとんどあらゆる問題が審議され、その決定はシアトルの A F L 系諸組合の行動に大きな影響を及ぼしていたのである。<sup>(14)</sup>

もちろん、当時のシアトルの労働者が、いわば一枚岩となって東部の A F L 主流派に抵抗していたというわけではない。フリードハイムによれば、当時のシアトルの A F L 系組合には3つのグループ、あるいは傾向とでも言うべきものがあった。急進派 radicals、保守派 conservatives、そして革新派 progressives である。

---

(14) Robert Friedheim, *The Seattle General Strike*, Seattle: University of Washington Press, 1964, pp. 25-27.

急進派の中には、AFL系組合以外の組織には属していないいわば自由奔放派 free-wheeling radicals と、IWWとAFL系組合の両組織に二重加盟している内部浸透派 borers とがあった。

IWWの組合員、すなわちいわゆるウォブリーズ Wobblies がAFL系組合にも加盟した最大の理由は、当時のシアトルでクロズド・ショップ制が普及していたからである。すなわち、彼らはAFL系組合に加入することなしにはシアトルで仕事に就くことができなかったのである。もちろん、AFLを内部から変革すること、あるいは内部に混乱を引き起こすことを目的として、AFL系組合に加入したウォブリーズも存在した。

もっとも、彼らがAFL系組合の重要なポストに就くことはまれであった。委員長、書記など組合の重要ポストの多くを占めていたのは保守派の活動家たちであった。この事実は、ウォブリーズの活動がきわめて活発であった、本当かどうかははきわめて疑わしいが彼ら自身が一時主張したところでは、組合員の半数以上がウォブリーズであったという、ボイラー製造工組合第104支部のような組合においてすら、変わらなかった。

さて、シアトルの労働運動を特徴づけたのは第3のグループ、すなわち革新派の存在であった。このグループに属する人々の多くは、急進派の活動家と同じように、ゴンパース的な職業別組合主義、熟練工中心主義、あるいは「純粹にして単純な」労働組合主義の路線に満足していなかった。しかしながら、彼らは同時に、シアトルを中心とする太平洋岸北西部の労働運動が、ゴンパースに指導された東部のアメリカ労働運動の主潮流から分離することは、やはり好ましいことではないと考えていた。シアトル中央労働評議会書記 secretary のジェームズ・ダンカン James Alexander Duncan に代表されるこの革新派こそが、対立する急進派と保守派の間に立って、その両方が納得する、そして当時の客観的な情勢のもとで現実に可能な路線を追求しながら、シアトルの労働運動を指導していたのである。<sup>(15)</sup>

ダンカンと並ぶ革新派の中心人物として活躍していたのは、「合衆国にお

ける最初にして唯一の組合所有，一般向け日刊新聞 The first and only union-owned, general-interest daily in the United States」，<sup>(16)</sup>シアトル・ユニオン・レコード紙 *The Seattle Union Record* の編集長，ハリー・オルト Harry Ault（あるいは E. B. Ault）である。彼とユニオン・レコード紙は本稿の考察にとって別の意味でもきわめて重要である。なぜなら我々は，ストライキを契機とするシアトル労働界の日系人への態度の変化を，ユニオン・レコード紙に現れた論説の吟味を通じて明らかにしたいと考えているからである。

1912年にオルトが28才で編集を引き受けた時，ユニオン・レコード紙は発行部数3000部の週刊紙であった。しかしながら，彼の努力と，軍需ブームによる大量の労働者のシアトルへの流入とがその急成長をもたらした。発行部数は1918年までに2万5000部に達した。同年4月，オルトは保守派の反対を押し切ってユニオン・レコード紙を日刊とすることに成功した。<sup>(17)</sup>かくしてユニオン・レコード紙は，シアトル労働者に争議その他の情報を伝え労働者間の連帯を強化するための，あるいは一般市民に労働者の主張を説明するための，きわめて強力な手段となった。

それだけに，実業界その他の反労働運動勢力のこの新聞への反発は強かった。たとえば，シアトル商業会議所・商業クラブ会長のロイ・ジョン・キナーは，ユニオン・レコード紙は「ボルシェビキ・プロパガンダの擁護とロシアのソヴィエト政府の防衛」のための記事で埋まっていると，これを攻撃したのである。<sup>(18)</sup>

(15) 以上。 *ibid.*, pp. 37-50.

(16) Mary Joan O'Connell, "The Seattle Union Record, 1918-1928: A Pioneer Labor Daily", M. A., University of Washington, 1964, p. v.

(17) *Ibid.*, pp. 22, 25-32

(18) Friedheim., *op.cit.*, p. 51.

### Ⅲ ストライキの起点

シアトル・ゼネラル・ストライキは、その直前にシアトルおよびタコマで発生した造船労働者のストライキに対する、いわゆる同情ストライキであった。

この造船所ストライキの発生に至る経過はかなり込み入っており、ここで詳しく検討する余裕はない。ここでは、このストライキが単なるシアトル造船業界における労使対立の結果ではなく、大戦期の連邦政府諸機関の労使関係への介入のあり方に対する造船労働者の抗議行動としての性格を持っていたという事実を強調しておきたい。

すなわち、造船業で発生する労働争議を調停するために1917年8月に設立された造船業労働調整委員会 the Shipbuilding Labor Adjustment Board の裁定は、最初からシアトル労働者の不満の対象であった。特に彼らを憤激させたのは、この委員会が、当時の激しい労働力移動を抑制するために、太平洋岸と大西洋岸とで同一の賃金スケールを設定しようとする意図を持っているように思われたことであった。当時、太平洋岸の造船労働者は伝統的に大西洋岸よりも高い賃金を受け取っており、シアトルの労働者は太平洋岸の物価高、戦時生産への貢献などを理由に、この格差を正当なものと考えていたからである。<sup>(19)</sup>

緊急艦隊公社 the Emergency Fleet Corporation 総裁のチャールズ・S・ピアズの態度がこれに油を注ぐ結果となった。彼は、シアトルの経営者に対して、労働者の要求を拒否せよ、さもなければ造船の原料である鋼鉄の供給を停止すると通告したのである。<sup>(20)</sup>

かくして1919年1月21日、関連する21の職業別組合支部（最初のストライキ投票の時点では17組合）で構成されたシアトル金属産業評議会の指導のも

---

(19) *Ibid.*, pp. 56-61.

とに、3万5000人の造船労働者がストライキに突入した。<sup>(21)</sup>

翌1月22日、金属産業評議会は、シアトル中央労働評議会の定例会議において、シアトルの全組織労働者は造船所労働者への同情を示すためゼネラル・ストライキに突入する、という提案を行った。聴衆の叫び声と混乱の中でこの提案は可決され、中央労働評議会傘下の各組合はこの件について組合員による投票を行うこととなった。まもなく多くの組合が活動家たちの予想を上回る圧倒的な比率でストライキへの突入を支持し、シアトルの労働者はゼネラル・ストライキに向かって進んでいったのである。<sup>(22)</sup>

造船所ストライキがほぼ一直線にゼネラル・ストライキに発展したのは、言うまでもなく当時のシアトルにそれを可能ならしめるいくつかの条件が揃っていたからである。

第一に、すでに見たように当時のシアトルでは、AFL的な狭い職業別組合の枠を越えた地域的な労働者の連帯感が強く存在していた。

第二に、第一次大戦期の諸事情が、ゼネラル・ストライキという過激な手段に対するシアトルの労働者の抵抗感を薄めていた。

軍需産業の発展に伴って新たにシアトルに流入した未熟練労働者は、以前からシアトルで活動していた熟練労働者よりも急進的な傾向を帯びていた。彼らの中には、北西部森林地帯における4L（ロイヤル・リージャン）の成立とIWWの敗北によって、そこでの活動に見切りをつけ、シアトルに新たな活動の場所を求めて移住してきたウォブリーズも含まれていた。<sup>(23)</sup> 彼らは最初からゼネラル・ストライキを資本家階級と闘うためのもっとも強力な武器と規定しており、AFL系組合のようなゼネラル・ストライキに対する抵

---

(20) ピアズはその通告を電報で行った。ところがその電報は、メッセンジャーボーイの間違いで、経営者の団体であるMetal Trades Associationにではなく、労働者の団体であるMetal Trades Councilに届けられ、かくして彼の行動が労働者に知れ渡ったのである。(Ibid., p. 70)

(21) Ibid., p. 75.

(22) Ibid., pp. 81-83.

抗感がなかったのである。

第三に、ダンカンやオルトをはじめとして、ゼネラル・ストライキの意義、効果などについて冷静な判断を下す能力を持った当時のシアトル労働運動の指導者のほとんどが、このきわめて重要な時期にシアトルを離れていたという事実である。

その頃彼らは、1月14日からシカゴで開催されていた、サンフランシスコの労働運動家トム・ムーニーの投獄に抗議するための大会に出席していたのである。全国からこの大会に出席した1000人にのぼる活動家たちは、もし独立記念日までにムーニーが再審を受けることができなかったならば、ゼネラル・ストライキを呼びかけてこれに抗議することを決定した。すなわち、シアトルの25人の代表は、全国的なゼネラル・ストライキの問題について討議した直後に、出身地シアトルにおけるゼネラル・ストライキの知らせを聞いたのである。<sup>(24)</sup> 代表団の一人であったアンナ・ルイズ・ストロング Anna Louise Strong は、後に、もしもこの代表団の人々がその時にシアトルにいたならばゼネラル・ストライキは発生しなかったであろうであろう、と述べている。ストロングによれば「ゼネラル・ストライキが（シアトルで）可決されたと聞いて彼らは驚いた。彼らはシアトルに帰る汽車の中で議論した。10日前に彼等は活気のある、革新的な、しかし良く統制のとれた労働運動を後に残してきた。今彼等は何にむかって帰ろうとしているのだろうか。」<sup>(25)</sup>

(23) 「4 Lの成立とともにIWWは森林における敗北を認識した。その後IWWの活動家の多くはこの産業を捨てて都市に移動した。そこで彼らの多くは急速に成長しつつある造船業に流入し、この産業の爆発的成長に伴う混乱を利用しようと試みた。」(Jonathan Dembo, "A History of Washington State Labor Movement, 1885-1935", Ph. D. diss., University of Washington, p. 169). なお、4 L,あるいはロイヤル・リージャン(すなわち, Loyal Legion of Loggers and Lumbermen)については、邦語でさしあたり、拙著『企業社会とアメリカ労働者——1900年-1920年』御茶の水書房, 1988年, 119-121頁を参照されたい。

(24) Friedheim, *op.cit.*, p. 81.

(25) Anna Louise Strong, *I Change Worlds*, New York, 1935, pp. 72-73.

もちろん彼らがシアトルに引き返した時には、事態はすでに彼らの手に負えなくなっていた。かくして、フリードハイムによれば、「革新派は解決不可能なディレンマに直面」した。すなわち、労働者の多くはすでに熱狂的にゼネラル・ストライキを支持していた。したがって、革新派の指導者がもしここで公然とストライキに反対したならば、今まで彼らがシアトルで享受してきた一般労働者の支持と敬意を失う結果になったであろう。しかしながら、ここで強硬な主張をして事態の主導権を取り戻すことも、彼らにはできなかった。彼らはゼネラル・ストライキの成り行きをけって楽観していなかったからである。<sup>(26)</sup>

その後の経過は以下のようなものであった。<sup>(27)</sup> まず1月26日の日曜日にシアトルの職業別組合の幹部たちの会合が開かれた。この会合で彼らは、以下のようなプランを次回の中央労働評議会に提案することとした。すなわち、もしゼネラル・ストライキが批准されたならば、そのストライキは参加組合のそれぞれ3人の代表から構成されるストライキ委員会によって指導される、そしてそのストライキ委員会の最初の会議は次の日曜日、すなわち2月2日に召集される、というプランである。この提案は、1月29日の中央労働評議会の定例会議で承認された。この時点で、すでに24の組合が投票によってゼネラル・ストライキへの支持を確認していた。ストライキ反対の報告をしたのは2組合に過ぎなかった。かくして、2月2日に第1回のゼネラル・ストライキ委員会 General Strike Committee が開かれた。この会議は、シアトルの110のAFL系組合支部と中央労働評議会とを代表する300人ほどのメンバーから構成されていた。彼らのほとんどはこれまで労働運動を指導する地位に就いたことのない一般の労働者であった。この委員会がその後のゼネラル・ストライキに関する諸問題の最高決定機関となったのである。

2月2日のゼネラル・ストライキ委員会は膨大な課題に取り組まなくては

---

(26) Friedheim,, *op.cit.*, p.88-89.

ならなかった。まず信任状の審査と役員を選出が行われた。またストライキ突入の日時は2月6日と決定された。

委員たちは、清掃車運転手組合の代表たちがなぜ彼らの組合はストライキに反対したかを説明した時、ゼネラル・ストライキというものの特殊性をあらためて認識した。彼らの説明によると、シアトル市の衛生局長から運転手組合に対して、もしも彼らが病院や療養所の廃棄物の運搬を拒否するならばその行為は市の条例に違反すると通告があり、運転手組合では、ゼネラル・ストライキ委員会がこのような行為をストライキ突入の例外として認めるかどうかを判断することができなかつたので、ストライキに反対することを決定したというのである。

市営発電所を閉鎖するかどうかという問題も激しい議論の対象となった。この問題には結局結論が出なかつた。

市営発電所その他の問題の討議を通じて、300人という数は効率的な会議の運営には多すぎるということが多くの委員に明らかとなった。かくして、ストライキ計画の作成に一般的に責任を負う、15人の委員から構成される執行委員会が設立された。実際には、この委員会はストライキ免除申請の審査に最大の時間を費やすこととなった。また、この委員会の負担を軽減するために、広報、財政、戦術などを特定の問題を担当するいくつかの小委員会も設置された。

最後に議論されたのはストライキのスローガンであった。2つの案が提案された。一つは「我々には鎖以外に失うものはなく、得るものとして全世界がある」という案であり、もう一つは「団結して我ら勝利せん Together We Win」という案であった。後者が採用され、ゼネラル・ストライキ委員会

---

(27) 以下の経過は、Anna Louise Strong, *The Seattle General Strike: An Account of What Happened in Seattle and especially in the Seattle Labpr Movement, during the general Strike, Ferbruary 6 to 11, 1919*, Seattle: Union Record Publishing Company 1919, pp.10-16, Friedheim, *op.cit.*, pp.84-91, 97-99による。



はようやく13時間の審議を終えたのである。

あらたに指名された15人の執行委員は、ゼネラル・ストライキ委員会がまだ開かれている時間にすでに、仕事にとりかかっていた。翌日ももちろん休むわけにはいかなかった。最初に免除を申請したのは消防夫組合第27支部であった。この申請は承認された。その後も申請は相次いだ。

免除を申請したのは労働組合だけではなかった。たとえばシアトル港の当局は、私的利潤が含まれていないこと、緊急の必要があることを指摘して、政府の船舶に積荷をする労働者の労働許可を申請した。これは承認された。キング郡の幹部は市や郡の建物の警備員の免除を要求した。これは却下された。またシアトル市の街路局長は、一部地域への水の供給が電気ポンプ装置に依存しているという理由で、市営発電所を閉鎖しないよう要請した。彼はまた、膨大な量の冷蔵食品がだめになることや、街灯が消える事によって市の治安が乱れることも指摘した。この問題は大きすぎて委員会は即答を避けた。<sup>(28)</sup>

このような過度の忙しさは、執行委員会からその本来の課題に取り組む余裕を奪った。フリードハイムは次のように指摘している。

その母体であるゼネラル・ストライキ委員会と同様に、執行委員会は主としてストライキの戦術に関心を持っていた。それは、いかに効果的に無政府状態をもたらすことなくシアトルを閉鎖するかということであった。しかしながら、ストライキが何らかの積極的な目的を達成しようとするのなら、労働運動内部の責任ある個人か集団が、一貫性のある要求のリスト、あるいはこれらの要求が拒否された場合の退却計画、さらにはゼネラル・ストライキの期間の決定などについて、計画を作成しなければならなかったのである。<sup>(29)</sup>

(28) Strong, *The Seattle General Strike*, pp. 16-17, Friedheim, *op.cit.*, pp. 100-103.

(29) *Ibid.*, p. 105.

シアトル労働運動関係者の中でこのような能力をもっていたのは、やはりダンカンに代表される革新派の人々であった。ゼネラル・ストライキ一般に批判的な保守派と、展望のないままにストライキに熱中する、あるいは革命の手段としてゼネラル・ストライキを位置づけるが、しかし具体的にストライキをどう革命に結び付けるかの戦略はまったく持っていないウォブリーズその他の急進派の間で、ダンカンやオルトが最後に取り組んだのがこのような仕事であった。すなわち彼らは、このストライキに一定の期限を付けることによって、シアトル市民の間に広がり始めた恐怖と反発を和らげようと試みたのであった。<sup>(30)</sup>

しかしながら、彼らの計画は結局失敗した。事態は逆に、むしろ市民の不安を煽り、ゼネラル・ストライキをして、単なる同情ストライキというよりもロシアで発生したような革命の準備である、と市民たちに確信させる方向に向かっていったのである。

そのような事態を招いた原因の一つは、2月4日のユニオン・レコード紙に掲載されたアンナ・ルイズ・ストロングの、「どこへ行くのかを誰も知らない No One Knows Where」と呼ばれる以下のような論説であった。

歓呼の声をあげる者も多く、恐れる者も多いだろう。

いずれの感情も有益であるが、しかしたいしたことではない。

我々はわが国の労働者によってまだ成されたことのない巨大な運動に着手しようとしているのであるが、しかしこの運動が——どこへ行くのかは誰も知らない！

我々はヒステリー症状を必要としない。

我々は労働者の鉄の行進を必要としている。

——中略——

労働者は産業を閉鎖するだけでなく、公衆の衛生と公衆の平和のために必要な活動は適切な管理のもとに再開するであろう。もしストライキが続くならば、労働者はまず

(30) *Ibid.*, pp. 105-107, Strong, *The Seattle General Strike*, p. 20.

ます多くの活動を再開することによって公衆の困苦を防がねばならないと感ずるのである

う  
それ自身の管理のもとに。

そしてそれが我々が次のように言う理由である。我々は始めようとしているが、しかしこの道が——どこへ行くのかは誰も知らない。<sup>(31)</sup>

この論説は、ゼネラル・ストライキをその本来の目的、造船労働者のための単なる同情ストライキに引き戻そうとしていたダンカンやオルトの努力とは、まったく正反対の効果をもたらした。誰も知らない行く先、それは革命を意味するのではないか、と多くの市民が考えたのである。反対派の新聞は翌日コメント抜きでこの論説を転載した。

これ以上に世論を刺激したのは、電気労働者組合第77支部のビジネス・エイジェント、レオン・グリーン<sup>(31)</sup>の発言であった。ウォブリーズでも自由奔放派でもない独立の急進派でシアトルに来てまもない謎の男、おそらくはロシア系だったのではないかとされているレオン・グリーンは、ストライキ突入前日の記者会見で、街灯や食料保存設備はもちろん、病院や火災報知器に至るまで一切の例外を認めない、市営発電所の完全な閉鎖を宣言したのである。「病院はどうする。そこでは光がなくて人々が死ぬかも知れない」という質問にも彼は、「免除は認めない No exemptions」と答えた。

実際には、グリーンと彼の組合にそのような力はなかった。彼の第77支部は外部作業員や検針員で構成されており、発電所内の労働者は第44支部に属していたのである。しかしながらこの報道の影響は大きかった。後にアンナ・ルイズ・ストロングは、「ストライキの中でおきた他のどんなことにもまさって、このグリーン<sup>(31)</sup>の意図についての第一面の記事は、恐怖と怒りを呼び起こした。外部の者だけではなく、労働運動の内部においても同様で

---

(31) Friedheim, *op.cit.*, pp. 110-111.

あった」と書いている。<sup>(32)</sup>

こうして緊張が最大限に高まった中、明確な方針と展望を欠いたままに、シアトルの労働者はアメリカ史上初の本格的ゼネラル・ストライキに突入していったのである。

---

(32) *Ibid.*, p. 116, Strong, *The Seattle General strike*, p. 22.